

イギリス人の歴史好きと周年事業

青木 康

二〇一四年度後半、大学から半年間の研究休暇を与えられて、数年ぶりにイギリスで暮らす機会をえた。イギリスに住むのは、一九九七年度、二〇〇八年度につづいて今回が三度目だが、日々の生活のなかで少し時間的な余裕をもってイギリスの様子をながめていると、イギリス人の歴史好きを感じる事がよくある。

まず、大型書店の棚を見てまわると、歴史書のコーナーが広い。さらに、(多くの場合、歴史書に隣接して)伝記のコーナーがある。これは、日本の書店ではほとんど見られないが、古い時代から現代まで、いろいろなジャンルの人びとの伝記が、たいていは対象人物の名前順に並べられている。イギリス近代政治史を専門とする私にとっては研究対象である一八世紀の国王や政治家の伝記が並ぶこともあり、学術的なものから、そうではないものまで、いろいろと見ることが出来る。その横には、軍事史の専用コーナーがもうけられている書店もあり、イギリス人が歴史好きという場合の幅広さが思われる。

また、さまざまな歴史的できごとの周年事業をよく目にする。何かの事件の何十年かあとの同じ日に

イギリス人の歴史好きと周年事業（青木）

記念式典がおこなわれる（イギリスとのかかわりも深いフランスの例だが、二〇一四年は第二次世界大戦中のノルマンディー上陸作戦から七〇年にあたるので、一九四四年に上陸が敢行されたのと同じ六月六日に、イギリスのエリザベス女王やアメリカのオバマ大統領も参加してフランスで式典が挙行された）というだけでなく、そのできごとに関する博物館や関係場所での展示や講演会、テレビの特集番組の放送など、広義の周年事業が一定期間にわたって展開されることが少なくない。これも、イギリス人が歴史好きだからこそ盛り上がるし、また逆に、イギリス人の歴史好きを背後でささえていると思われる。

二〇〇八年度にイギリスに来たときには、一八〇七年に実現した奴隷貿易廃止（映画「アメイジング・グレイス」で描かれた）の二〇〇周年記念事業の余波にいろいろなところで遭遇した。こちらは二〇一三年の夏休みの短期滞在中のことだが、二〇一三年はロンドン地下鉄開業一五〇年ということで、ロンドン交通博物館はもとより、多くの場所で一世紀半前のロンドンの交通事情について学ぶことができた。

二〇一四年は、言うまでもなく第一次世界大戦の勃発から一〇〇年である。イギリス人が第一次世界大戦に寄せる思いは、このような特別な周年でなくても強いことはよく知られているが、勃発一〇〇年ともなれば、関連する記念企画は本当に枚挙にいとまがない。筆者にとって身近なところでは、ブリティッシュ・ライブラリで『Enduring War: Grief, Gri and Humour』と題された小展示が六月から一〇月にかけておこなわれた。「戦争に耐える」という企画で、「ユーモア」が副題に登場するところがイギリスらしいと言えるかもしれない。再びロンドン交通博物館を訪れてみると、前年の初期の地下鉄

に関する展示にかわって、赤いロンドン・バスが兵士を運んだというような、第一次世界大戦関係の展示が目立った。

「今年は●●から何十年（あるいは何百年）」という言い方をした場合にどんな歴史的できごとが頭に思い浮かぶかは、人によって、例えば年齢により、男女により、住んでいる地域により、また、支持政党の違いにより、変わってくるであろう。思い浮かぶいくつものできごとのなかで、何についての周年事業を資源を投入して展開するか、その決定はきわめて選択的、すなわち政治的であり、それ自身が歴史的研究の対象となりえよう。二〇一四年の前半に第一次世界大戦をとりあげた展示をおこなったナショナル・ポートレイト・ギャラリーは、一四年の後半からは、より小規模ながら、やはり一〇〇年記念の企画として、第一次世界大戦勃発直前の時期に展開されたサフラジェット（女性参政権活動家）による芸術作品破壊闘争に焦点をあてた興味深い展示をおこなっている。

実は二〇一四年は、現在のウィンザー朝にまでつながるハノーヴァ朝が創始されてから三〇〇年でもあり、正直に言えば、一八世紀の政治に関心のある筆者にとっては、第一次世界大戦の勃発から一〇〇年よりもずっと気になるところであるが、イギリス全体としては、公平に見て、ハノーヴァ朝の創始は第一次世界大戦勃発に圧倒的に負けてしまっている。ハノーヴァ朝関係の周年事業も、ケンジントン宮殿などの王室関係施設ではおこなわれているが、社会的な露出の量が第一次世界大戦とは圧倒的に違っているように思われる。

明けて今二〇一五年は、イギリスにとっては超大物の周年事業の年である。一二一五年、ジョン王が

イギリス人の歴史好きと周年事業（青木）

諸侯の要求事項を認めて、王の専制的な統治に法的な歯止めがかけられたというマグナカルタ調印の物語は、日本でもよく知られているであろう。二〇一五年はそれからちょうど八〇〇年ということになり、関連事業はすでに二〇一四年中から始まっていた。一四年一月二五日にはロンドンのギルド・ホールで、『イギリス国民の誕生』で知られる歴史家リンダ・コリーが記念講演をおこなった。筆者もそれを、四日後に、（普段は、議会の論戦を中継する）テレビの議会チャンネルで見ることができた。先に「イギリスにとっては何と書いたが、マグナカルタ八〇〇年は、イギリスの法体系を受け継いだアメリカ合衆国でも注目されており、マグナカルタ八〇〇年の熱狂ぶりはイギリス一国にとどまらない。

ここで話は突然とぶが、フランス革命が勃発する直前の一七八八年、イギリスに「革命協会」(Revolution Society)という団体が結成された。ここでいう「革命」はもちろん、まだ起こってないフランス革命のことではなく、一〇〇年前にあたる一六八八年の名誉革命を指している。この団体は名誉革命を記念し、イギリス政治のさらなる改革を考えようとするものであったのである。それでは、一六八八年に国王ジェームズ二世のカトリック化政策への抵抗に立ちあがり、のちに名誉革命と呼ばれることになる大きな政治変革を実現した人びとは、その年が、カトリックの脅威から国を救った一五八八年のアルマダ海戦からちょうど一〇〇年にあたることも意識していたのではなかったか。現代イギリスの周年事業のことを考えるうち、そんな妄想がわいてきた。

（本学文学部教授）